

今週のメニュー

[トピックス](#)

「塩ビへの理解定着により市場回復を確信」
- 菅原会長 V E C 総会後の懇親会にて強調 -

[随想](#)

古代ヤマトの遠景（36） - 【東国の平定】 -

信越化学工業（株） 木下 清隆

[編集後記](#)

トピックス

「塩ビへの理解定着により市場回復を確信」
- 菅原会長 V E C 総会後の懇親会にて強調 -

5月26日に塩ビ工業・環境協会 第12回総会・懇親会を開催しました。懇親会には官庁、報道関係、関係業界などの方々にご参加いただきました。冒頭、菅原会長は塩ビに対する見方の流れが変わった、この定着により市場回復を果たせると挨拶しました。続いて、来賓の経済産業省製造産業局 後藤次長から祝辞をいただいた後、なごやかな内にも活発な議論がなされ、盛況に終わりました。

以下に、菅原会長の挨拶を掲載いたします。

昨年の夏ごろまでは原油や鋼材などが高騰を続け、原油は200ドルになることが当たり前に語られておりました。それが、秋の米国発の金融バブル崩壊が引きがねとなって、一転世界的な景気の急降下が起こりました。需要の蒸発と、稼働率の大幅低下や工場閉鎖による雇用の喪失とが逆スパイラルを起こした、まさに激動の1年であったと痛感しています。

塩ビ業界の環境もこの1年は実に厳しいものとなりました。昨年度は塩ビの国内出荷量が前年度比86%の1,088千トンと32年ぶりの低水準、輸出も前年度比72%の563千トンと13年ぶりの低水準となりました。実に大変な状況です。

この1 - 3月の日本の景気はブリザードが吹き荒れるような状況でしたが、今はやや春の陽射しも見える様にはなりました。しかし、塩ビの内需には依然として力がありません。是非とも、政府の景気刺激策を早く実行して頂き、その効果が早く現われる様、願っております。



菅原会長



懇親会風景

塩ビは社会のインフラ投資に需要を大きく依存しています。公共投資をはじめとする国の対策が効を奏して、塩ビの国内需要が今年度後半には立ち上がり、来年度には落ち着きを見せてくることを期待致しております。

さて、昨年の総会で協会の活動として『塩ビが地球環境に貢献する、社会を支える素材である』という理解を広めて、塩ビの需要回復を図ることを基本とすると申し上げました。この一年間のV E Cの活動を振り返りますと、永年の関係者の努力が成果として現れ、『塩ビバッシング』から、『塩ビを正しく見て、正しく評価する』ことへ流れが変りました。

主要な展示会などで、塩ビは多くの方々から注目をうけ、様々なコミュニケーションをさせて頂きました。その中で、『塩ビでなくてはいけない』、『塩ビを再び使いたい』と言う多くのお問い合わせがありました。私共もご一緒になって協力させて頂き、塩ビを復活採用する動きが多数具体化してきています。

塩ビは品質も加工性も優秀で、しかもリサイクルできることを理解され、カード、文房具などへ塩ビの使用を再開される大手のおお客様が出てきております。

また、これまでリサイクルが難しいとされていた塩ビと繊維の複合建材で、新しいリサイクル技術が開発されました。これを使って、多数のおお客様が塩ビ建材の使用に結び付いたリサイクルのシステム作りをされています。これは塩ビリサイクル支援活動が実を結んだもので、今後の塩ビ需要回復に繋がることを期待しています。

更に、地球温暖化対策への塩ビ製品の貢献がはっきりと認識され、東大キャンパスのCO2排出削減計画では樹脂サッシ窓が大きな貢献をすることを実証して頂きました。

これらに加えて、各方面のメディアに塩ビや塩ビ製品の優良な品質特性や環境特性を幅広く採り上げていただき、私共の活動に力を頂いたことを感謝申し上げます。

これまで申上げました様に、塩ビの特性や環境優良性への理解は、確かな手応えをもって根付いてきており、それが需要へと結び付いてきています。只今現在は不況の真っ只中ではありますが、こうした理解、流れを定着させて行くことによって塩ビ市場の力強い回復を果たせると確信しています。

今年度も、塩ビに係わる技術を後押ししながら、各界への積極的な働きかけや広報に取り組みます。そのための個別活動では、リサイクルの推進や樹脂サッシ窓の普及促進などの地球温暖化対策への貢献に取り組んで参ります。また、化学物質管理、保安問題などにも注力して参ります。

当協会の活動は自助努力のみで果たせるものではなく、各界の皆様のご支援・ご協力が欠かせません。改めまして、本日ご列席の経済産業省をはじめ関係行政政府のご指導と塩ビに関係される皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。 (了)

随想

古代ヤマトの遠景(36) - 【東国の平定】 -

信越化学工業(株) 木下 清隆

卑弥呼政権の後を継いで、初代倭王は東国制圧に踏み出したが、その時代の記録が殆ど残されていなかったため、初代倭王に続く後継倭王達の諸々の事跡も含めて、日本武尊という一人の人物に集約されて、記紀に記述された。その日本武尊は当然創作された人物であるが、そのモデルとなったのが初代倭王であることを、宮簀媛と草薙剣の物語を通して明らかにした。恐らくそうであろうと云う程度の確信でしかないが、ここでは一応このよ

うな考え方にしておきたい。

この東国制圧の具体的なことは殆ど判らないが、この制圧が行われたことによって或る変化が起きたと考えられる。その内容を列記すると次のようになる。

- (1) 尾張の勢力がヤマト政権に組み込まれると同時に、その後のヤマト政権の運営に大きな影響力を持つようになる。その時期は、応神天皇が誕生するときで、この応神天皇誕生の裏には壮大なドラマが展開されるが、その一翼を担ったのが尾張勢力である。応神天皇誕生物語はこのシリーズで後で述べることにする。



垂仁天皇陵

- (2) 上毛野(かみつけの) 下毛野(しもつけの) 一帯の勢力もヤマト政権下に入るが、このとき天皇家の皇子がその統治のために遣わされた。上毛野、下毛野は現在の群馬県、栃木県地方を指しているが、ここ的一大勢力がヤマト政権と戦い、最終的には和睦し、その条件として皇子が送り込まれたと考えられる。この経緯の一端は崇神紀に出てくるが、この地方は、以後、ヤマト政権には何かと協力的であったようである。
- (3) ヤマト政権による東国諸国制圧の目的は、ヤマト政権の仲間に入るか否かを問うものであったと考えられ、従って、降伏国はその後も自国の統治権を認められ、領土についてもそのまま安堵されたとみられる。では、何が変化したのかと言えば、恐らく税の徴収を受けるようになったと想定される。税としては農産物の提供と、労働力の提供に分けられよう。後世になるとこの税体系は「租庸調」という形に整備されることになる。
- (4) 東国制圧でヤマト政権に屈した国々を「服属国」と一括するなら、この服属国からの税の徴収を任務とする役人が必要となってくる。このような任務を任されたのが物部氏(もののべし)や大伴氏(おおともし)だったと考えられる。彼等が当初から物部とか大伴と、名乗っていたかどうかは不明であるが、勢力を拡大するに従って、このような氏名(うじな)が定着していったものと考えられる。
- (5) 東国制圧は、諸国に推戴された初代倭王が、自国の兵も含め諸国から提供された兵士を束ねて戦うことで推進されたものであるが、後継倭王の時代においても同様だったと考えられる。わかり易くいえば連合軍によって東国は制圧されて行ったということである。ところがこの東国制圧の勝利者は一体誰だったのかという問題が出てくる。名目上はヤマト政権であるが、諸国がその実利の分配に与ったわけではない。先の税収を連合軍で分配し始めたら、それが紛糾の種になって政権そのものが崩壊しかねない。従って服属国の税はヤマト政権そのものが受取ったはずである。では誰かと云えば、結果的にその実利を受取ったのは時の倭王だったことになる。このような税収をよりどころにして、政権の基盤を安定させるため、との名分で行政機構を拡充して行けば、その最大の受益者は倭王だと云うことになる。

(6)このような仕組みにより、倭王家は徐々に強大な権力を持ち始めることになる。恐らく、四世紀の中葉には、東国の制圧がほぼ完了し東国は平定されたと考えられる。初代倭王からこの制圧までの間に、多くの倭王が歴史的には登場したと考えられるが、記紀には順に以下の5名の天皇名しか記載されていない。実際とのところがどうだったのかは、記紀の編者達も分からなかったのではなかろうか。

崇神天皇、垂仁天皇、景行天皇、成務天皇、仲哀天皇

東国平定によってもたらされたものの概要は、以上のようなものであったと考えられるが、初代倭王の登場以来、約100年経った四世紀後葉になると、ヤマト政権の勢力圏は大きく塗り替えられることになる。更に朝鮮半島情勢が風雲急を告げ、ヤマト政権は否応なしに半島問題に引きずり込まれて行くことになる。(つづく)

前回の「古代ヤマトの遠景」(35)【日本武尊】(2)は、下記からご覧頂けます。

<http://www.vec.gr.jp/mag/222/index.html>

編集後記

総会後の懇親会で、塩ビ業界を取巻く環境はこの1年は実に厳しいものだったが、このような不況の時こそ「塩ビが地球環境に貢献する、社会を支える素材である」との理解を各界へ定着させていくことで、塩ビ市場の力強い回復を果たす事が出来ると確信していますと会長は挨拶しております。折りしも、内閣府の5月の月例経済報告で、3年ぶりに景気判断を上方修正するとか、4月の塩ビ出荷量が18ヶ月振りに前年同月超えとなっています。未だ、明るさまでは見えないものの底を打ったのでしょうか。これは、主に中国向け輸出の好調によるもので、国内需要が回復しているわけではないので、公共投資への経済対策の効果を期待する一方、会長挨拶にあるよう各界への継続的且つ地道な働きかけや広報に、関係者一同全力を挙げたいと思います。(古鍋)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録・解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp